

〔特集〕

子どもの育成と看護の役割 はじめに

¹⁾ 東京大学大学院医学系研究科, 医学部家族看護学・²⁾ 千葉大学看護学部

杉下 知子¹⁾ 小宮 久子²⁾

現在, 我が国は少子高齢社会といわれているが, 近年, 少子化を危惧する声が高くなっている. どの家庭も経験するケアを多く必要とする人生のステージは, 子育てと高齢者の介護である. 急速な高齢社会への対応として介護保険制度が導入されることになったが, 子育てにはこのような対策が不十分なままである. このような現状の中で子育てが変化し, 子育て支援が大きな社会問題になってきている. 核家族化が進み, 地域の間人関係も希薄になり, 子育てに祖父母, きょうだい, 隣人等の協力を得ることが少なくなっている. きょうだい少なく, 乳幼児と触れ合う経験のないまま成長した若いカップルは, 仕事が忙しい, 自分の時間を持ちたい, 子育てが煩わしいなどの理由で, 子どもを持つことを回避したり, あるいは親になった場合にも子どもへの関心や愛情が不十分になったりする.

子育ての過程では親自身も成長することができること, 子育てには喜びや楽しさがあること, 長いライフスパンの中で子育てを回避したことによる不利益があることなどを, 人々が理解することが必要であろう. 男女共同参画型社会の推進の中で, 育児をよりスムーズに実践する上で, 社会が子育てをどう支援するかということは, 現代社会の重要なテーマである.

子育てには, 子どもとその親や家族に対して, その周りにいる人々の支えが必要である. 看護職は個々の子どもや親・家族をケアすることができる立場にあり, また子どもたちの集団や地域内の子どもたち全体の健康を支援することもできる. 看護職の持つケアスキルは育児支援に大いに役に立つと考える.

本特集は, 保健・医療・福祉・教育などさまざまな場において, 看護職が育児支援活動にどのような力を発揮しているのかを提示し, 子どもの育児に対する看護の役割を明らかにすることを目的にした.

看護職は, まず自らの共感性を高めることに努め, そして対象の人々の共感性を高めるように援助していくことが必要であり, それは子育てを支援することに役立つものである.

看護職は, 個人個人を支援することはもちろんであるが, 社会のシステムを構築していくことも必要である. 例えば, 我が国では出産後, 母親の実家に里帰りして家族に援助してもらうことが多い. そこで母親あるいは父親だけでなく, 祖母やその他の家族も必要に応じて育児支援のための休暇がとれるような制度や, 育児経験のある女性が育児ヘルパーとして家庭で援助する制度等が考えられる. 看護職の役割として, 子どもの育成にかかわる親や家族, 多くの専門家と連携し, 新たな支援体制づくりを推進することも重要である.

北欧諸国のように, 女性の就労と子育てが両立し, 一家庭のもつ子どもの数が増すことは, 成長発達期の子どもたちにとってプラス要素であるばかりでなく, 家族の生活を楽しく豊かにする大きな要素でもある. 成熟期を迎えつつある我が国の社会を再構築する際には, 子育てが楽しい社会システムづくりを目指すことが肝要であり, 主に病気や障害をもつ子どものケアや成長発達援助活動をしている看護職はその経験を基に大いに貢献できると確信する.

本特集は, 第25回日本医学会総会(1999年4月4日)におけるシンポジウム「子どもの育成と看護の役

割」の発表内容に基づいて、シンポジストの方々に家族看護学の視点を中心に執筆していただいたものである。